実践報告

英　語　科

報告者：針谷　彩花

１　課　題

研究部は昨年度発足し、普通科の研究テーマは「読解力向上」と設定された。しかし、そもそも読解力とは何かという定義が曖昧なままスタートし、学校組織全体として研究部の活動に対する理解や興味・関心も薄く、結果として成果もあやふやなまま年度末を迎えたことが、昨年度の反省点であった。

今年度も同様のテーマが課されたが、校長が向上を求める読解力の定義（「文章を読んでその内容を理解し、解釈する力」、「狭義の国語的な読解力に留まらない、教育活動の指導全般を通して付けさせたい力」など）が示され、研究部内で一定の共通認識を得た上で研究部の活動が始まった。

校長から示された「文章を読んでその内容を理解し、解釈する力」について、英語科の課題としては「英文の和訳はできても、深い意味が理解できない」ことが挙げられる。例えば、”New technologies have been introduced to make aquariums better. A doughnut-style fish tank makes it possible for big fish to swim around and around.”（新しい技術が、水族館をより良くするために導入されてきた。ドーナツ型水槽は、大きな魚がぐるぐると泳ぎ回ることを可能にした）という英文について、支援すると大多数の生徒は日本語に訳することができたが、なぜ水槽がドーナツ型だと大きな魚がぐるぐると泳ぎ回ることができるのか・その利点は何なのか、一部の本校生徒は自力で読み取ることができなかった。

２　目　標

教科書の　「文章を読んでその内容を理解し、解釈する力」を育てる。

３　具体的方策

ブルームの目標分類学に応じて、多様な認知を要求する発問を授業内で行った。主に低次思考スキルに関連する発問は英語で行い、高次思考スキルに関する発問は日本語で行った。生徒には可能な限り英語での応答を促したが、日本語での回答も許可した。そのうえで、日本語での応答を英語ではどのように表現するか考えさせ、添削を行った。また、ペアやグループで協働することも積極的に奨励した。

４　結　果

日本語の助けもあり、多くの生徒が「文章を読んでその内容を理解し、解釈する」ことができた。高次思考スキルに関する発問に対しては、ペアやグループでの議論によって理解が深まり答えを出すことができた。一方、日本語の使用率が高まったことに加え、教科書を使用した他の言語活動にかける時間が減ってしまった。

5　次年度に向けての課題

生徒の英語力の範囲内でできることのみに絞って授業を行うと、読解も言語活動も浅いまま終わってしまうことが、私が本校での授業を通して感じた難しい点だった。「読解力向上」という目標のもと、日本語を活用することで、個人的な肌感覚ではあるが、これらの質が高まったように感じた。

近年、応用言語学の世界では、第二言語習得において母語の果たす役割が見直されつつある。英語を苦手とする生徒が多い本校の実態を鑑みると、日本語の活用は妥当な選択肢の一つである。しかし、それによって授業時間が圧迫され、言語活動にかけられる授業時間が減ってしまうのが問題だ。英語力はインプットのみで伸びることはなく、アウトプットも行ってこそ伸びるのだ。この課題に対しては、一人１台端末の活用を提案したい。特にアウトプット活動については、ライティングのオンライン共同編集（ネイティブによる即時フィードバック）やスピーキングの発表動画撮影に置き換えることが可能である。もちろん、すべてをデジタルに置き換えることは教育的に良い結果を産まないだろう。これまでのように、実際に人と交流し、人前で発表する経験も積ませることも重要だ。しかし、全体最適を目指すならば、一部でも新しいやり方に置き換えることに挑戦するべきである。

次年度は、日本語と英語、デジタルとアナログ、低次思考スキル・高次思考スキル、インプットとアウトプットなどのバランスを考慮しながら、読解力向上を目指して授業を展開したい。